



TITLE:

人文 第36号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第36号. 人文 1990, 36: 1-47

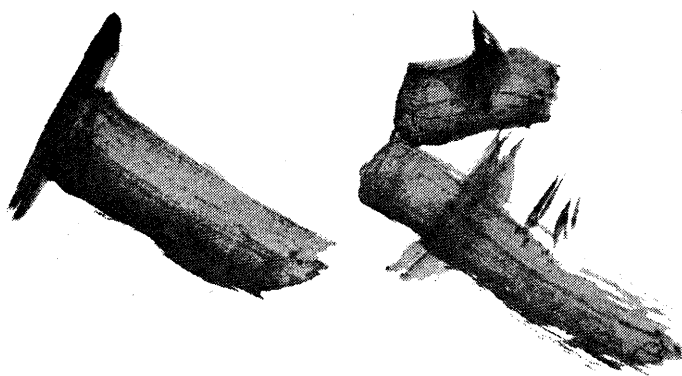
ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57162>

RIGHT:



第三六号



1990

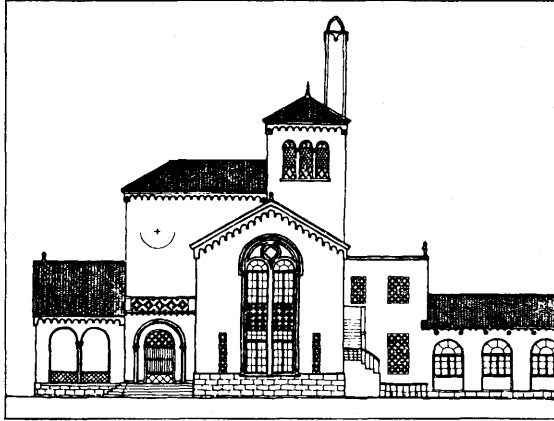
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三六号

1988年12月——1989年12月

も く じ



随 想

助手のころ……

熊野からヴォルガへ……

勤善懲惡について……

人文研の四十二年……

南京出土磚壁画竹林七賢図模本縁起……

山田 慶兒

2

講 演

夏期講座……

京都の町（塚本）／孝子のパラダイス（佐原）／漢字以外（高田）／フランス革命と知識（富永）／革命と伝統（阪上）

開所記念講演……

軍事からみた近代日本（古屋）／穀食忌避の思想（麥谷）

退官記念講演……

中国古代の遺物に表わされた

「気」の図像的表現……

感想・大学における研究と教育……

近世ヨーロッパ社会の底辺……

林 巳奈夫

尾崎雄二郎

中村賢二郎

報 告

おくりもの（24）・人のうき（24）・外国人研究者・招へい

外国人学者・外国人共同研究者・外国人研修員（25）・東洋

学文献センター講習会・講演会（27）・お客さま（29）

共同研究の話題

概念体系と用語の再検討をめざして

札——かたちの文化……

鬱にして快……

江川 温

小南 一郎

横山 俊夫

旅

北京の春……

ターバンを脱ぎすてたシク教徒……

ナポリへの旅……

森 時彦

田中 雅一

甚野 尚志

書いたもの一覽

39

34

30

24

20

17

12

12

助手のころ

山田 慶 兒

わたしが東方部科学史研究班の助手として研究所に入ったのは、一九五九年十月一日であった。おなじ日付けに桑原武夫先生が所長に就任されている。

当時の科学史研究班には、篠田統・岡西為人・天野元之助・木村康一・北村四郎・今井溱・吉田光邦・宮下三郎といった人たちが、藪内清先生を中心に、球状星団の輝きを放っていた。わたしはその引力圏に捕えられた、小さな惑星にも似ていた。

研究会で最初に読んだのは『難経』、つづいて『本草綱目』、岡西先生の指導である。老先生が多かったから、結局わたしが毎週のように読むはめになる。そのうえ、藪内先生には週一回、はじめは『晋書』天文志、ついで『疇人伝』の特訓を受け、倉田淳之助先生には、川勝義雄・竺沙雅章両氏といっしょに、『文選』を読んでいただいた。入所してからの二、三年間について、わたしに残っているのは、朝から夜中までひたすら辞書に首をつっこんでいた、という記憶だけである。

藪内先生は、こと学問となると、まことに峻厳であった。読みかたを間違えたり、とんちんかんな解釈を下したりすると、「なにいノ そうじゃないノ」と容赦なく叱声が飛ぶ。辞書と格闘した数時間も一瞬にして空しい。だが、わたしにとって苦痛なのは、辞書を引くことでなく、中国の伝統的知識人の思考法がさっぱり理解できないことであった。その歴歴たる証拠が、『抱朴子』をあつかった、中国科学史にかんするわたしの最初の文章であり、最大の失敗作である「中世の自然観」だ。「異様な印象を受けました」という島田虔次先生のことばが、いまでも耳底に痛い。

『朱子語類』にでくわすまで、わたしには悶悶たる日が続いた。そのころ科学史研究室に通っていた岡哲郎に、「もう少し辛抱しろ」と慰められたのは、つい「やめたい」ともらしたときだった。他面まことに寛容な藪内先生はいうまでもなく、慈父のように見守ってくださる篠田先生、「だいぶ漢文が読めるようになった」とほめてくださる天野先生、「きみにぜひとも『黄帝内経』を研究してもらいたい」と励ましてくださる岡西先生をはじめ、科学史班をつつむ温かい空気がなければ、わたしはとくに中国研究を断念していただろう。

『朱子語類』へ案内してくださったのは島田先生である。小野和子さんといっしょに江永注『近思錄』を読んでいただき、例によつてのとなちゃん振りに、島田先生をしばしばあきれさせながら、注に引かれた『語類』のことばを、わたしははじめて「分かる」と感じはじめていたのだった。それから数年間、わたしは『語類』に没頭した。難解な俗語は田中謙二先生に教えていただいた。田中先生も、藪内先生に負けず劣らず、厳格な師であった。「まだこんなことも分からのか!」、となんと雷を落とされ、思わず涙をこらえたことか。「朱子の宇宙論」の原稿を読んでいたとき、先生はある箇所「まだこんなことも分からのか!」と朱筆を入れられた。わたしは念のため、初校のさいにその箇所を見ていただいた。すると先生は、「まだこんなことも分からのか!」とふたたび訂正されたのだが、その文章はわたしの最初の原稿とそっくりおなじだったのである。わたしは思わずにやりとした。わたしの心に自信のようなものが湧いてきたのは、その瞬間であった。それからまもなく、わたしは同志社へ移った。

熊野からヴォルガへ

ミヒヤエル・ヴィッツェル

初詣と初日出を、と大晦日の晩に熊野那智を訪れた。新年の賑わいの中の大社や寺を詣でた後、闇と静寂の中に浮かび上る那智滝の滝壺近くの飛滝神社で一つの絵馬を見つけた。向かい合った二羽の鳥が榊の木の下に羽を広げ口を開けている図である。その途端、この図と古代インドのヴェーダの古い詩の一節が私の中で重なった。――二羽の鳥、仲良き同志、同じ木に掴まる。一羽は甘い木の実を食べ、一羽はそれを見る。――

那智大社には鳥にまつわる伝説や祭事がある様だが、中でも最も有名なのが古事記の八咫の鳥である。高木神の使いとして神武天皇を熊野から大和へと道案内した鳥で、大任を果たした後、大社に伝わる伝説によると、大社に帰り着き鳥の姿をした石と化したそうである。さて地図を見ると吉野の手前に天の川という川がある。すなわち神武天皇と八咫の鳥は天の川を通って大和に入った訳である。天の河原には神々が居る事を考えると、天皇は「この世」から「よい国」である吉野、大和に入った事になるのではないだろうか。古代中近東、ギリシア、インドの神話では天の川に鳥がおり、中国にも天の川に鶴が羽を広げて牽牛織女を会わせる話がある。古事記に限らず鳥が使者や道案内をする例はユーラシアに多く見られるが、ゲルマン神話でも鳥が重要な役割をしているのが興味深い。これは中世アイスランドで書かれたものだが、キリスト教の影響はほとんど見られない。この神話では鳥はオーディン（＝ヴォータン）の同志であり、彼の肩に座し、地上の状況を見に行っては戻り、出来事を神に囁き知らせたのである。この鳥にしても八咫の鳥にしても、しばしば不吉とされる鳥がなぜ神の使者なのであろうか。戦場で死体等を食べあさる鳥は古代アイルランドの英雄詩では戦死者の霊と考えられ、インドのヴェーダでも鳥がこの世に戻ってくる死者の霊と考えられている。ヴェーダを編集した聖仙はしばしば鳥の名前で知られ、儀式のなかで老人が鳥の名で呼ばれること

がある。なぜなら、聖仙はすでに精霊であり、老人は間もなく霊としてヤマ神の「あの世」に旅立つからである。すなわち彼らは二つの世界を往来できる鳥として扱われていたからである。また「二羽の鳥」のモチーフもユーラシアに見られ、型を少しかえ、「双頭の鷲」としてヒッタイトや東ローマ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国等の紋章として用いられている。

ところで天の川の場合は、日本、インド、ゲルマンの神話で「天の真名井」や池が天の川にあり、「真名井」も池も子供達が誕生する場所である事が共通している。この池からコウノトリが赤ちゃんを運んでくる話がよく知られている。神々は天の河原に集まったり、その中の岩に住んでいるのであった。

この様に日本とユーラシアに散らばっている神話には共通点や類似点が多く見つけられる。例を挙げるときりがないが、注意すべき事は、それらの共通点、類似点を個別的にうわべだけをみて比較してはならない事である。まず第一に各神話の構成のシステムを明白にしなければならぬ。たとえば、「天の川」が各神話にあるというだけではなく、その天の水が人間の生誕に関係があるという同じシステムがなければならぬ。例えばインカでは天の川の黒い穴はリヤマやその他の動物にたとえられる。この場合には先に述べた諸神話との間にシステムの上で互いに何の関連も見られない。それに反しユーラシア及びその周辺の神話では、天地誕生や宇宙観のシステムが似ており、同じ型の世界起源であり、人間誕生や黄泉の国等の世界観を持っている。私の推察ではユーラシアの諸神話は伝播や影響ではなく、非常に古い共通の源泉から出ていると思うのである。ロシアの数人の言語学者達はユーラシアの多くの言語は非常に古いノストラティック系言語に属すと主張している（フィノウグリアン、日本語を含むアルタイック、セミティック、インド・ヨーロッパそして多分中国語もノストラティック系である）。言語が同系である事と神話のシステムの類似性の二点を鑑みると、北アジアのどこかに（蒙古とヴォルガ川の間）のステップ及び森林地帯だと私は推定しているが）住んでいた、極めて密接な関係を保持していた種族もしくは種族のグループからこの言語と神話が生まれたのではないだろうか。こんなテーマを各分野の専門家で共同研究ができれば——丁度現在私が参加させてもらっているカシミール研究のように——そんな夢を私は抱いている。

勸善懲惡について

ジェームス・マックマレン

徳川前期の文学論は、朱子のリゴリスティックな「勸善懲惡論」から出発したが、元禄期に入ると、この思想はもう少しヒューマニスティックな「文学は人情を道ふ」と主張する伊藤仁斎説によってだんだん置き換えられて行つたと云うのが通説である。そして享保には、たしかに荻生徂徠が「勸善懲惡」を「大事成誤」として正面から否定している。熊沢蕃山は、こうしたながれで、「情について多くの言葉をついやし」た存在として中村幸彦氏らに注目されているが、蕃山が早くも既に寛文末期頃、朱子の「勸懲説」を否定したと云う事實は、余り知られていないようである。蕃山の語録を記した『息先生道談』で彼は云う。

勸善懲惡なれば善惡ともに教になるといふ説もたらざるに思フ也。悪人は惡の教になる處をはみずして惡の助にする故に惡をしるして教になるということはなき也

この『道談』は、寛文末期延宝初年に出来たものであると云われているが、詳しく見れば貞享年間と思われる資料をも含むので、その時代は明瞭ではない。ところが蕃山の勸懲否定論に TERMINUS ANTE QUEM を与える証拠がほかにある。これは京大の中院文庫に蔵されている中院通茂の『源氏聞

書」と云う『源氏物語』の注釈書の序の「講義」と云う処である。この「講義」は通茂自身の書いたものではなく、通茂の儒教方面の師にあたる蕃山の『源氏見様之書』を再編成したものである。中に次のような一文が見える。

好色淫風を記す事勸善懲惡の褒貶の為といふ事毛詩にも源氏にもからやまとの人々いへる事なれともその義理浅し惡を記して人の戒にハならざる者也

この文章は現存の『源氏見様之書』にはないが、『道談』と同趣なので、蕃山がその著者であることは疑いないように思われる。通茂の自筆日記に依れば、彼がこの「講義」を含むと思われる『源氏』の「桐壺」の注釈書の清書を延宝元年九月三十日に「校合」しているので、当時明石に住んでいた蕃山がその前に勸懲否定論を何らかの形で通茂に伝えたのではないかと思われる。



人文研の四十二年

園田辰夫

学徒動員で将来の展望も開けなかったので中学を中途退学し、格野で百姓を手伝っているうちに終戦をむかえ、東方文化研究所に入所したのは、昭和二十一年十一月であつた。二階の司書室で故倉田淳之助先生と同室、私は文献類目のカードを作る毎日であつた。先生はよく買出しに行かれ、一人になった私は、塔の中間にロープをたらし、雲岡石窟出版に使つたクロスを束にしてサンドバッグの代わりにし、ボクシングの真似事をやって、エネルギ―を発散した。タバコを覚えたのもこの頃で、女子事務員にタバコを吸わないのはカイショナシといわれ、むせながら練習した。

月給は三〇円で昼食代にもならず、日曜日は映画のエキストラで小遣金を稼いだ。また衣笠球場でアイスキャンデー売りもやったが、一本売ると二円五〇銭になり、月給分を一日で稼いだこともある。時代祭りの行列に出た時は、運悪く藪内所長にみつかつてしまった。

昭和二十四年人文科学研究所が新発足、私の仕事は事業掛といつて、正式に認めてもらえない、庶務でも会計でもないポストで、出版物の国内外の交換・発送や講演会等の仕事の主であつた。その頃、講習会に出ると三年間で司書の資格をとれるというので、私も行きたかつたが、事務に來たのだからいらないだろうと云われ、とうとう資格をとらないでしまった。運命の別れ道で、図書畑であれば六級まで行けるが小生は五級でおさらば、何とも云いあられせず残念で仕方がない。

書庫の閉館時間になると「書庫にどなたもおられませんか」と三度云つて帰るきまりであつたが、ある時、故倉田先生を閉じ込めてしまい、先生は道を歩いている人に応援を求めて脱出されたと聞き、今

だに申しわけない。ある日、女子事務員がロビーでキャーキャー。何事かと行つて見ると、蛇が赤いカーペットの上をニヨロリニヨロリ。ここは男の出番と、尾をつかんで三度回してほうり投げた。これは自慢話の一節。

故水野教授を隊長とする、イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊出発のとき、トヨタ自動車から自衛隊用のアンピュランスの提供を受けた。これを神戸港まで陸送するのであるが、運転手がサイドミラーのない車はいやだという。仕方なく小生生まれて始めてトラックを運転することになった。荷物を満載して、無事神戸港までとどけた。今考えてみても、どの道をどう行つたのか、まるで思い出せない。ボクゾールという英国製の自動車が基礎物理研と共用の頃、故湯川先生を乗せたことがある。「先生、台風を原子力で何とかありませんか」といったが、どのような答であつたのか、これも思い出せない。

東一条の西洋文化研究所が人文研に移管された当初、中は相当荒れていた。宿直をすることになったが、布団は汚れ、不衛生この上なく、仕方なく宿直の度ごとに酒を買つて来て飲んで寝た。その頃小生の宿直の時、色の白い目のくりくりした若い女性がよくピアノの練習に來た。小生に気があるのかな、と思つたりしたこともある。またこの頃のことであるが、藤岡先生が海外調査から持ち帰つたセンザンコウの剥製があつて、暗がりからじつと見つめているようですす気味悪かつた。藤岡先生に、催眠術をかければ、君の痙性斜頸の原因が解けるのではないかといわれ、梅棹先生の弟さんに、糸で五円玉をぶら下げて、催眠術をかけてもらったが、結局なおらなかつた。世にも不思議な病氣である。

小学校の担任の先生に、飛行機でも整備士がいなければ安全に飛べないのだと聞かされた言葉を忠実に守つて、定年を迎えた。青年から老年の一步手前まで、人文研での人生を振り返つて、悔いが残らないでもない。

南京出土塼壁画竹林七賢図模本縁起

長 廣 敏 雄

一九六三年一月七日、ボクは南京博物院にいた。今から二六年前のことだ。当時、日中国交未回復だった。米澤嘉圃君（当時は東大教授）を団長とする日本美術史代表団のボクは、団員のひとりとして訪中したのだ。途中、米澤君が病気で倒れたので、南京到着後はボクが団長代理をした。

南京博物院ではとても好遇をうけた。ガランとした一室の壁には大きな二枚の拓本が張られていた。ボクにはそれが何かは、すぐ分かった。南京西善橋晋宋墓の塼壁画「竹林七賢と榮啓期」にまちがいない。数年前の「文物」（八・九期、一九六〇）に調査報告と拓本図版が掲載されていた。だが「文物」掲載の拓本図版はともに見られたものでなかったの、ボクはホンモノがみたかったのだった。

ボクは首にぶらさげていた6×6カメラを目前のホンモノの拓本に向けて、シャッターを切った。六、七枚撮影した。ガラス・ケースにはいつてなかったの、撮影に好都合だった。すばらしい塼壁画である。

琴を弾ずる嵇康の悠然たる姿、それに対坐する阮籍のリラックス姿の組み合わせ。劉伶の鋭い眼光。阮咸の琵琶を弾ずる優雅な指先き。スゴミのある高士榮啓期の弹琴。

一九二九年秋の北京で書いた鄭顥孫先生の微妙な琴のひびきがボクの耳に鳴りつづけた。

あとで南京博物院の館員に、南京西善橋の塼墓の見学はできないかと要求した。あの墓は雨水浸透で、状態がわるいので、だめだとの答えにボクはひどく失望した。

帰洛後、カメラマン小西晴美君に拡大写真をつくってもらった。学界に発表する必要性を感じたので、

早速「国華」(八五七号)に論文をそえて發表した。かつて一九五九年ロンドン大英博物館で伝顧愷之筆「女史箴図卷」をボクはみた。その長所も短所もすつかりのみこんでいる。南京西善橋磚壁画からは、格段に顧愷之の息吹きを感じとれると、ボクはおもう。

ただ南京西善橋磚壁画拓本の弱味は、筆描からの複製であり、筆描が各所で分断している。多少も見やすくするのは、紙本の複製をつくってみたらどうか。ボクは日本画家北野正男君に相談の上、このやっかいで困難な日本画の筆描による複製を吉田友之画伯におねがひした。一九六三―六四年のことである。吉田画伯の苦心の複写画(全九葉)をボクは愛蔵していた。一九八九年のいま、人文研創立六十年に当たるので、この画集一帙を研究所に寄贈する次第である。保存設備のよくない研究所は注意して保管してほしい、というのがボクの老婆心だ。(一九八九年歳末に記す)



講演



夏期講座（平成元年度）

元年八月一日～三日
於 本館会議室

京都の町

チヨウ

塚 本 明

現代の都市化状況の下、歴史上の都市住民がどのような共同性を持っていたのかを考えたい。町（チヨウ）は、平安京以来の行政区画であるマチとは区別され、中世後期に商業上の利害共通性に基づき住民によって形成されたものであり、歴史上近世社会において最も大きな役割を果たした。形としての特徴は、道を挟んだ両側を一つの単位とし（両側町）、間口が狭く奥行の長い家屋敷が立ち並び、町の共有財産としての町会所、木戸門、番小屋などがあった。住民構成とし

ては家持と借屋人に大別され、町の正式な構成員として町政に関与できるのは家持の家長のみであった。家屋敷所持の名義人には女性になることもあるが、町政に関わることはできない。町の役人に就いたり、町内治安維持などの町の役を勤めることが、正式な構成員たる資格となったからである。なお、このほかに町によつて雇用された町用人、番人がいたが、これらは町内の構成員の平等性を維持するために不可欠な存在であり、差別的待遇を受けていた。町は構成員を人格的に保護し、また行政の基礎単位としての機能も果たしたが、一方で特定の職業の者の往来を拒むなどの著しい排他性と、内部においても身分的格差、差別性を必然的に持つものでもあった。

さて、近世の都市においては住民支配のための行政機構は大変小さく、町奉行所の側も都市住民の生活に関わる事業に関しては極力町の機能に依存していた。しかし、近世中期以降になると次第に都市の住民構成は変容し、町の共同体規制も弛緩する。それによつて町内部において人格的統制が弱まるが、従来町が果たしてきた都市における公共的機能が低下してしまうことともなった。こうした中で都市住民は新たに町を単位にするのではなく、様々な形で都市全体を意識するようになっていく。町の連合体が恒常的な組織として

結集を強め、とりわけ市中に賦課される様々な費用について独自に管轄しようとする志向を示すようになる。その結果、都市の様々な公共的な負担について、それまでの支配者からの役賦課という形で、町ごとにまた家持のみが負担していた体制から、都市住民全体が主體的に負担するような体制へと移行していく。これは、町単位のものに代わって、新たに都市単位の共同性の獲得と言えるものであった。このような動きに対応して住民支配のあり方も変容し、合わせて近代社会の前提となったのである。

孝子のパラダイス

——漢代祠堂考——

佐 原 康 夫

後漢代、墓とその付属施設に浅いレリーフを施した画像石を飾ることが流行した。祠堂は墓の付属施設の一つで、墓前で定期的に行われる祭祀の際、墓主の霊前に飲食物を供えるための建物である。その代表的な例が有名な武氏祠だが、近年、武氏祠と技法、年代の共通した祠堂画像石と長文の題記も二種類発掘されている。これらを手掛かりに、祠堂の画像の意味を考えてみたい。

祠堂の正面の画像では、下に墓主を中心とした車馬行列、上に双闕を具えた台閣があつて神獸や羽人が群がり、その東側には靈樹があつて墓主の乗ってきた車が停る。台閣の中では、迎え入れられた墓主が鄭重な拝礼を受けている。祭祀の際にはこの台閣の前に供物が置かれることになる。両側面の上端には東王公と西王母の神像があい対し、天井には星辰や鬼神の行列、瑞応や天罰の様が描かれる。東王公の下には厨房の図のあることが多い。これらは祠堂の用途と関連した宗教的な意味を持つ。その中で厨房や靈樹が東に置かれるのは、東が陰陽五行の木徳、すなわち万物の再生の象徴とされることと対応している。天井の図像と併せて考えると、最高神である天帝の配下で司命神が人間の寿命を司り、死者の魂は東岳泰山に集められる、という信仰と関係がある。墓主は生前の徳によつて仙界に迎えられ、尽きることのない饗宴でもてなされているのである。このような画像を持つ祠堂で行われる祭祀は、仙界の饗宴を地上で再現するものといえる。

祠堂にはそのほかに、伝説の帝王や孔子一門、立派な女性や孝子、歴史上の義士たちの図像が描かれ、見る者への儒教的な教訓の図と考えられてきた。しかし孝子や義士の伝説では、主人公の至誠に天が感応して奇瑞を現わす、という筋のものが多く、彼らは死後仙

界に赴いたとされたり、神として祭られることもある。したがって、これらの図像も天や鬼神の信仰と深く結びついていたと考えなければならない。

祠堂は儒教の徳目の最上位に置かれる孝の実践として建てられたものであるが、その画像は、儒教や道教といった思想的色分けからこぼれ落ちてしまった、当時の人々の心情の世界を今日に伝えているのである。

漢字以外

高田 時雄

中国の言語が甲骨文の時代から今日までずっと漢字という書記体系を用いて書かれてきたことは疑いようのない事実である。実際、中国人の言語生活に占める漢字の地位は圧倒的な重みをもっている。しかし中国語を表記する文字は常に漢字であるとは限らない。漢字の存在を知らずに、あるいは知っただけでも意図的に他の文字を使用することは十分に有り得る。「漢字以外」とはどのような漢字以外を用いる中国語の世界である。

現在、ソ連のキルギス共和国にはドゥンガン族というイスラムの民族集団が住んでいる。彼らはもともと

中国の陝西・甘粛あたりから移住した人々で、その言語は中国語の一種である。しかし彼らは漢字をまったく知らず、ロシア文字による正書法によって自らの言語を表記している。新聞や雑誌も刊行され、文学も存在する。これは漢字以外の典型的な例である。

しかしより古い時代にも、漢字によらず他の文字体系で中国語を書く社会のあったことが次第に分かってきた。敦煌は八世紀から九世紀にかけて前後六、七十年ばかりチベットに支配されたが、その影響によって一部の集団は漢字を用いずにチベット文字で書くことを始めたのである。このチベット文字による中国語社会は十世紀になっても確実に存在した。彼らは日常生活の上で必要なさまざまなものをチベット文字で書き写し、それが相当数発見されている。勤行に用いる仏典、童蒙教科書、九九口訣、詩詞、「社」と呼ばれる互助組織の回覧状などがそれである。もちろんこの場合、彼らは漢字をまったく知らなかったというわけではない。知っただけでもチベット文字の便利さの方を取ったのである。

これらのチベット文字で書いた中国語の豊富な例は別のところでご覧いただくとして、ここには今まで知られていない短い曲子の例を掲げておこう。

tsheng si hya'n beg' gog /

k'ung shang ka' ci' go "im tsywg /
ha shi' tig twai' meng cu dan /
"yid dan / dan khag then ha khwag //
(P. t. 1235 V°)

題して「鄭郎子辞」。漢字に直すと、「清絲絃白玉、宮商角徵五音足、何時得对明主彈、一彈、彈却天下曲」となる。漢字のテキストも敦煌から出ている(S. 6537, P. 3271)が、字句に若干の異同がある。

フランス革命と知識

富 永 茂 樹

フランス革命のみならず、ほとんどあらゆる革命について言えるだろうが、革命は政治の領域にとどまることなく、広く生活文化のなかにまで浸透してゆく。

ここでは、社会生活の根幹としての空間の秩序の変革(度量衡の統一)と時間の秩序の変革(共和暦の制定)というふたつの問題を探り上げることにはしたい。

旧体制においては地方によってさまざまな度量衡の単位が存在し、またその計算も複雑であって、市場経済の発達とともにその弊害が指摘されてきたが、早くも革命のはじまった翌年には、制度の改革と新制度に

についての研究を科学アカデミーに委託することをうたった法令が可決され、これをうけたアカデミーのコンドルセやラヴォアジエらは、長さの単位としては地球の子午線の四千万分の一、重量については蒸留水の重さを基本にすること、また各単位の計算は一〇進法によることなどを提唱する。地球と水という普遍的で不变な自然の存在に準拠枠を求め、かつ一〇進法の採用をつうじて合理主義を徹底させるというのは、いかにも自然科学者らしい発想である。子午線の長さについてはダンケルクーバルセロナ間の測量が実施され、度量衡の新制度は一七九三年の八月に成立するにいたる。共和暦にも同様の発想を読み取ることができるであろう。すなわちここでは一週間は従来の七日から一〇日に変えられ(一日も二〇時間になり、一時間は一〇〇分となる)、また一年は九月二二日からはじめが、これは共和政の成立した記念日であるとともに秋分の日でもあり、地上においても天上においても《平等》が実現した日付である。このような暦を考案したジルベール・ロムは数学者の出身であった。もうひとつ注目してよいのは、各月の名称と毎日のシンボルが農業ないし自然にちなんで決定された点である。これは当時高まりつつあった非キリスト教化運動に深く関係していると同時に、フランスの産業の中心が農業にある

というジャコバン独裁期の認識を反映してもいる。

生活習慣にかかわることがらの変革が人びとのあいだで受け容れられるのはけっして容易ではない。度量衡の新制度が完全に実施されるには、その後約五〇年を要し、逆に共和暦はたった一三年で廃止されてしまった。両者の運命は正反對だが、しかしそのどちらにも共通して確認できるのは、社会秩序の変革にさいして自然科学の知識がきわめて有用な役割を果たしうると、また果たさなくてはならないという、自然科学者たちの自負心である。彼らにとってフランス革命とは、自分たちの理論の応用を試みるための、格好の場合なのであった。

革命と伝統

——フランス民法典の編纂過程——

阪 上 孝

改良は個別的な問題にかかわるから、その問題が解決すればそこでどまるのにはたいして、革命は社会全体の組織原理にかかわるからそういうわけにはゆかない。革命はより根本的な原理に到達し、社会のより広い範囲に広がり、より深部に達することを求める。いかえれば革命は市民の日常性のレベルに達し、日常

生活を新たな原理にもとづいて組織しなければならないのである。こうして結婚や相続などの市民間の日常的な関係を規制する民法の制定、それも個々の単行法ではなくて市民社会の法的組織体系としての民法典の制定が求められる。

しかし民法は日常生活に直接にかかわっているだけに、その変革ないし創設は、憲法などの公法の変革とは別種の困難に出会うことになる。そこではさまざまな習慣、習俗、伝統が生活に密着して生きており、いわば「無意識」として支配しているからである。したがってこの「無意識」を明るみにだし、一掃し、新たな原理をうちたてるという三重の課題、要するに新しい主体の確立を遂行しなければならないのである。こうして民法典の編纂は、革命と伝統とが日常生活に近い場面であつかりあう場であり、同時にその闘争の賭金なのである。

そうはいっても革命がすべての伝統を破壊するといったことは不可能である。むしろかえって伝統を否定する思想や運動のなかに、伝統が新たな内実をとまないうながら生きているということが認められるであろう。民法典の編纂にかかわることというと、そこでは、法と立法者に与えられる特別の意味と重み、自然法の優越、自然法から演繹的に構成された法体系としての民

法典といった知的な伝統が強力に働いているのを読み取ることは容易である。いいかえれば革命と伝統は対立するけれども、その対立は単純な対立ではなく、使い古された言葉をあえて用いれば弁証法的な対立だということができるだろう。

この対立、革命的想像力と現実との弁証法を民法典の編纂という場面で考えること——これが報告の主題であった。

開所記念講演（平成元年度）

元年十一月九日
於 本館会議室

軍事からみた近代日本

古屋 哲 夫

軍事の面からみると、近代日本の基礎は徴兵制度によって、一般民衆を兵隊に仕立てあげることから固められていった。兵隊に仕立てるとは、その生活意識とは無縁の天皇への忠誠を外から押しつけ、それを上官に対する服従につなげてゆくことであった。幕藩体制下では軍事と縁のない生活をつづけてきた民衆は、当

初はこの新しい負担である徴兵を強く忌避したが、それを克服するために大きな役割を果たしたのは、明治十七年頃から、行政主導のもとに、全国的に組織されてくる地域の有力者団体であった。つまり徴兵制度は、維新後の行政の展開に即応しつつ形成されてきた有力者秩序に包み込まれることによって、ようやく定着することが出来たのであった。そしてそれは、地域のなかに「天皇の軍隊」観を浸透させる役割を果たすものであった。

「天皇の軍隊」はまた、それに見合うものとして「統帥権の独立」という制度を生み出した。それはやがて、自分たちだけで仮想敵国を設定し、それに見合う軍備拡張を要求するという軍部の行動を生み出すことになり、また軍部大臣現役武官制を通じて、内閣を倒すような力を発揮することにもなった。それは云いかえてみれば、統帥権が、その独立の根拠とされた明治憲法第十一条をこえて、第十二条の軍の編成や常備兵額の問題に介入してくるということにほかならなかった。そして「大正デモクラシー」とは、一面から云えば、こうした軍部の動向への反撃であった。

「大正デモクラシー」は、この面ではよく戦ったと云えるかもしれない。第一次大戦後には軍部大臣官論が議会や論壇で唱えられるようになり、軍部は軍縮

を余儀なくされた。こうした状況のもとでは、統帥権の独立をふりかざしてみても、軍部が正面から政府を動かして次の戦争に踏み込ませることは困難となった。

しかし「統帥権の独立」はもう一つ、植民地の方向にも拡がっていた。台湾軍がおかれ、朝鮮軍がつくられることは、統帥権の領土の拡張をも意味した。それらの植民地軍は植民地における治安の確保を直接の目的としたが、中国の領土である満州に配置された関東軍が、満州における治安維持・權益確保に動き出してくると事は重大となった。統帥権のもとで国外にある軍隊を、政府が統制することは困難であった。

しかも関東軍の動向には、さきの徴兵制を包み込んでいる有力者秩序が共鳴盤の役割を果し始める。彼らにとつて満州權益とは、明治天皇の名のもとに、二十万の将兵の血によつて獲得した、いわば明治天皇の遺産であった。こうした現地軍部と有力者秩序との共鳴は、やがて政府や議會を押し流し、満州事変後のとめない戦争を生み出してゆくことになるのであった。

穀食忌避の思想

麥谷邦夫

穀物が農耕民族にとつての命綱であることは、古今東西を通じて変らぬ真理である。しかるに、その穀物の摂取を忌避する思想が古く中国に存在したことは、非常に興味深い問題といへよう。

古代中国における穀食忌避の思想は、神仙思想と密接に関連して出現した。『莊子』齊物論篇には、道 bodies 得者としての藐姑射の神人が理想的な存在として描かれてゐる。彼は五穀を食はず、代りに風を吸ひ露を飲み、雲に乗つて世界の果てまで自在に飛翔できるといふ。この神通力の由来は、彼が五穀の重濁な氣を摂取せず、清純で軽い風露の氣を摂取してゐることに求められよう。

穀物の摂取を忌避して不老長生を達成し神仙にならうとする術は、一般に「辟穀」あるいは「断穀」と称され、服餌や導引などともに神仙術の中核をなす道術の一つであった。その早い具体例として、漢初の名宰相張良が挙げられる。生来虚弱であつた張良は、晩年隠遁して神仙術の実修に没頭し、辟穀を行つて健康

の維持に努めたと伝へられる（『史記』本伝）。また、辟穀の術が古くから病氣治療に応用されてゐたことは、近年発掘された長沙馬王堆帛書中の「辟穀食気方」の存在によつて知られるところである。

後漢・王充の『論衡』には、当時流行の神仙術への批判が連ねられてゐるが、辟穀もその対象たるを免れてゐない。最古の仏教擁護論である牟融の『理惑論』にも、彼が実修した道術の例として辟穀が挙げられてゐる。また、西晋・嵇康は「養生論」のなかで辟穀の理論を展開し、東晋・葛洪の「抱朴子」も多く辟穀に言及してゐる。

このやうに、後漢以降、辟穀は広く一般の知識人の間に行はれたが、道教の成立にともなつて、辟穀の術はその理論体系の中に組込まれ、道教独自の三尸説などと習合して、穀物中の陰濁の氣から生じ人間の寿命を減ずる穀虫の存在が考へられるやうになる。その結果、辟穀の術は益々複雑化し、代用食料や穀虫を殺す薬の処方などが種々考案された。

辟穀の術は、元来、『莊子』に見える藐姑射の神人の在り方を模倣するところに発したと考へられ、陰濁の氣を捨てて混元の一氣（道）に復帰するといふ思想をその根柢に有する。穀物はまさに大地の陰濁の氣をふんだんに含むがゆえに忌避されたのである。一方、

俗界を離れて深山幽谷での修行に励む神仙道家にとつて、辟穀の術は差し当たつての飢餓をしのぐために不可欠な道術でもあつたのである。

西欧中世の社会メタファー

甚野 尚志

西欧中世においては、国家や教会などの社会組織、また諸身分の關係などが、しばしば多様なメタファーによつて論じられてゐる。それは、中世人の社会把握のあり方が、近代でのような分析的な記述と質的にことなることに根ざしてゐるが、とりわけ社会メタファーとして、ことなる諸部分の調和的統一を明確に示しうるやうなものが用いられた。代表的なものとしては、人体、蜜蜂、チェス、教会建築、船、弦楽器などがあげられる。今回の講演では、そのうち、チェスのメタファーについて取り上げた。

遊戲としてのチェスは、元来インドに起源をもち、十世紀頃に西欧に伝えられたと考へられている。駒の動かし方などの戦術については、十一世紀以降ラテン語、ヘブライ語、その他の俗語で数多く書かれてゐるが、これとはほぼ同時期に、十三世紀はじめからチェス

の個々の駒と社会の諸身分を比較し、そのあるべき姿を訓戒する書物が出現する。

このような書物のなかで、中世後期においてもつとも流布したものは、一三〇〇年頃にドミニコ会士チエソレのヤコブスにより書かれた『人間の習俗と高貴な人々の職務、またはチエスの遊戯について』である。そこで彼は、個々の駒と諸身分を比較しながら、それらの特徴、社会ではたすべき役割などについてのべている。チエス盤上の一列めの駒、つまり貴族の駒に対応する身分は、国王、王妃、裁判官、騎士、代官といった人々であり、その前列に位置するポーン（歩兵）の駒に対応するのは、他の一般の職業身分である。八つのポーンの駒は、それぞれがいくつかの職業を包括して象徴するものとされ、そのなかに数えられるものは多種多様である。すなわち、農民、鍛冶屋、金属細工人、大工、公証人、織匠、仕立て屋、床屋、肉屋、商人、両替商、医者、法律家、薬剤師、居酒屋、宿屋、都市の門番、共同体役人、徴税吏などで、当時の社会の職業分化を反映したものであらう。ヤコブスは、これらの職業身分がもつ特徴、守るべき規範などについて詳しく論じているが、彼の議論で興味深い点は、個々の職業身分がどのように中世社会のなかで位置づけられていたかが伺い知れることである。

このような社会メタファーを使った中世の社会論や身分論を分析することによって、中世社会における身分的編成原理の一端が明らかになるであろうことが期待される。

退官記念講演

元年三月十六日
於 本館会議室

中国古代の遺物に表わされた 「氣」の図像的表現

林 巳奈夫

講演はテーマが考古遺物に係るため、五十余点の図をB4判七枚にコピーして配布し、図を一つ一つたどって「氣」の図像的表現の解説が行われた。従って多数の図なしにその要旨を述べることは殆んど無意味である。しかし講演が行われたことを記録に留める必要もあると思うので、以下に簡単に記しておく。

春秋戦国時代に始まって清代に至るまで、中国思想の基本的概念として「氣」があり、天地万物を成立せしめる原質としての、また万物を機能せしめ、生産す

る原動力としての「氣」というものが、戦国から漢の思想家によって体系づけられて来ている。思想家が思索にとり入れる以前、「氣」に関する何等かの觀念が社会に普遍的に存在したであらうことは誰しも予想する所であるが、春秋以前の時代における「氣」の消息については、文献の欠如から従来殆んど何もわかつてゐなかつた。筆者はそれを明かにするため、圖像をとり上げる。

漢時代に天地の始まりについて『宇宙に原初的な「氣」が生じ、その軽くて陽なるものが上に升って天となり、重くて陰なるものが降って地となつた』と言はれることに注意し、漢代の圖像で天上の星座や日月の周囲に不規則な曲線で霞のようなものが画かれるのを天に升つた「氣」に、また鳥獸や神話的動物のはね廻る山嶽が相似た曲線で表わされるのを下に降つて地となつた「氣」に夫々当てる。さらに漢時代日月について『積み重なつた陽の「氣」は火を生じ、火の「氣」の精が日になつた。積み重なつた陰の「氣」は水となり、水の「氣」の精が月になつた』と考えられているが、漢時代の日月の圖像の周囲に先の天空や山嶽の「氣」と同じ表現のものが付加されているのを、日月となつた火の「氣」、水の「氣」の表現とみる。これらの漢代の「氣」の圖像的表現から時代を遡ると

戦国時代の青銅器を飾る鳥の羽根を構成要素とする紋様に到達する。そして更に羽根をもつて構成される青銅器の紋様は殷時代に遡る。この時代の青銅製の祭器に大きく飾られる奇怪な神面があり、同時代の最高神と考えられるが、その額の中央に逆梯形にまとめられた羽根の束があり、それは前三千年紀の揚子江下流域の新石器時代文化の神像の頭に放射状に立つ羽根に由来する。この神像は更に古く、前五千年頃の双鳥に負われた日と月の像に源がたどられる。これらの日と月の圖像の上からは炎のような形の「氣」が立ち升っている——さきに引いた漢代の日と月の圖像にかきそえられているのと殆んど変らない形で。これが日と月から放射される陽なる火の「氣」と陰なる水の「氣」の現在知られる一番古い圖像的表現である。

感想・大学における 研究と教育

尾崎 雄二郎

日本における学校教育を規定する法律は学校教育法というもののだが、そこでは大学について教育研究ということばが使われていて、教育の方が研究に先行する。

しかしそもそも教、育、学というような漢字にはいずれも「子」の字が含まれていて、それらのことが子どもにかかわることと受け取られていることがわかる。育の字には「子」がないように見えるが、実はこの字の上半分は「子」の字の逆立ちであつて、「うむ」にしろ「そだてる」にしろ、やはり子どものことである。もう一つ、これは先の三つの漢字のうち「教」、「学」に關してのことであり、特に「学」についてはその古形に關してのことだが、両方とも「支^{ほく}」、紀元百年の古い字引き『説文解字^{せつもんかいじ}』では「小擊也」、「かるくたく」、「こづく」位の意味をもった要素が含まれていることで、つまり「教える」、「学ぶ」ということには、子どもに強制するという意味合いのあつたことがわかる。

そういう意味の「教育」が、われわれのような学校で必要なことであるかどうか疑問のあるところだが、しかし大学教師がまず何よりもすぐれた「研究」者でなければならぬというとき、自分自身をいわば「教育」してすぐれた「研究」をさせる契機として、自分以外のすぐれた才能を、いわばその開花期において見つける機会をもつことが極めて有効であることを、私は私の経験から、信じている。

すぐれた才能は大学の専門過程でも、大学院でも、

つまり大学の中のどこでも簡単に見つけることができる、と、私のような経験のない人は思うかも知れないが、われわれが日常的に接觸する専門家、あるいは専門に片足をつつこんだ人たちは、開花期における驚くような才能を、もはや發揮する必要のない、つまりそんなものがなくても手続きを踏めばやって行ける段階にまで来てしまった、いわばのこり滓であることさえ珍らしくない。

すぐれた他人の才能に出会うことが、自分自身の才能が自分自身にとつて何であるかを自分自身に気づかせ、それが自分自身の研究に何かを与える。すぐれた他人の才能に出会う可能性の、大学において最も高い場所、教養過程での、たとえばわれわれのような分野でいえば大学に来てのはじめての外国語の「教育」、といった経験を、すべての「研究者」は制度としてもつべきではないだろうか。無責任な、ただし語りたかつた「感想」である。

近世ヨーロッパ社会の底辺

中村賢二郎

表題にいう「社会の底辺」とは、乞食・賤民・放浪

者を指している。乞食はいうまでもなく、生活の資を他者の施しに依存する人びとであるが、それぞれの国の経済事情によって違いはあるとしても、近世のヨーロッパでは生活費の全てないし一部を他者の施しに依存した人びとの数は、人口中相当大きなパーセンテージを占めていた。賤民とは、社会的に差別された職業に従事する人びとである。ヨーロッパで特定の職業を賤業とみなし、それらの職業に従事する人びとを、「賤民」として就業その他において差別したのはドイツだけであるが、他の国々でも就業に際しては多かれ少なかれ事実上の差別は行われていたのではないかと考えられる。放浪者とは、一定の住居をもたず、渡り歩くのを常としていた人たちである。彼らの中には、職業の性質上（たとえば旅芸人・行商人）各地を渡り歩かねばならぬ賤民のほかに、農業労働者・職人から零落し、仕事を求めて各地を転々としていた者も含まれ、後者の方が多かった。放浪者は少なくとも一時的に乞食をしていたが、ヨーロッパでは十六世紀以後、市町村に居住する貧民（乞食）は、各市町村で経済的に援助し扶養するのを原則とする救貧法が出されるので、放浪者は市町村居住の貧民（乞食）とは区別されたカテゴリーとなる。

この乞食・賤民・放浪者の関係は、乞食と賤民とを

それぞれ楕円で表し、二つの楕円を中心をずらして重ねた図で示すことができる。両楕円の重なった部分が放浪者に当たる。放浪者の中には犯罪を犯す者も少なくなかったので、十六世紀以後は放浪者は社会不安の醸成者、あるいは潜在的犯罪者として、厳しい取締りの対象となっていた。

ここでは放浪者の問題を中心にして述べる。放浪者は、江戸時代の日本でも取締りの対象となった無宿者に当たる。ことの性質上、その数は確かめがたいが、ドイツでは十八世紀で八一〇パーセントにのぼったと推定されており、十六・十七世紀でもかなり多かったのではないかと考えられる。そのような数字は同時代の日本では考えられぬことではないか。同時代のヨーロッパでもイギリスでは放浪者の数ははるかに少なかったで、その数字をヨーロッパに一般化できるわけではないが、ドイツでなぜそのように放浪者の数が多かったのかは、日本の事情とも対比して、考察に値するのではないか。

彙報 (一九八九年一月より一九八九年二月まで)

おくりもの

。藪内清名誉教授および山田慶兒併任教授は、中国科学院自然科学史研究所名誉教授に聘任された(一九八九年六月)。

。山本有造教授は「長期経済統計」全一四卷(東洋経済新報社 一九六五―八八年)に対し日経経済図書文化賞特賞を受賞(共同受賞)(一一月三日付)。

人のうごき

。浅田 彰助手(西洋部)は、京都大学経済研究所助教授に昇任(三月一日付)。

。尾崎雄二郎、林 巳奈夫(東方部)、中村賢二郎(西洋部)三教授は、停年退官(三月三十一日付)、京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。

。谷 泰教授(西洋部)を当研究所所長及び附属東洋学文献センター長に併任(四月一日―一九九一年三月三十一日)。

。永田英正滋賀大学教育学部教授は、併任教授(東方部)。(比較文化部門、四月一日―一九九〇年三月三十一日)。

。谷山正道広島大学助教授は、併任助教授(日本部)。(比較文化部門、四月一日―一九九〇年三月三十一日)。

。江田憲治助手(東方部)は、辞任(三月三十一日付)の上、京都産業大学外国語学部講師に転出。

。山田慶兒教授(東方部)は、国際日本文化研究センター教授に転出(四月一日付)、当研究所併任教授(東方部)。(文化交渉史部門、四月一日―一九九〇年三月三十一日)。

。井狩彌介、前川和也(西洋部)両助教授は、教授に昇任(四月一日付)。

。高田時雄助教授(東方部)は、京都大学教養部より配置換(四月一日付)。

。大浦康介助教授(西洋部)は、甲南女子大学文学部助教授より採用(四月一日付)。

。塚本 明氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)。

月一日付)。

。杉本俊宏助手(日本部)は、辞任(一〇月十五日付)の上、京都高度技術研究所研究員に就任。

。光永雅明氏を助手(西洋部)に採用(一一月一日付)。

。小林敦子助手(東方部)は、三月二六日成田発、スタンフォード大学に於いてアメリカ合衆国における中国文献調査を行い六月一〇日帰国。

。田中 淡助教授(東方部)は、四月二一日伊丹発、從江、黎平、錦屏他各地に於いて、貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査を行い五月九日帰国。

。狭間直樹教授、森 時彦助教授(東方部)は、四月二九日伊丹発、北京師範大学、中国社会科学院において、五四運動七十周年學術討論会参加及び研究資料収集を終え五月八日帰国。

。田中 淡助教授(東方部)は、五月一七日伊丹発、ダンバートン・オークス造園研究センターに於いて造園芸術史研究の情況シンポジウムに出席し、ペンシルベニア大学、フィラデルフィア美術館、フオッグ美術館、メトロポリタン美術館に

において資料収集を終え六月一日帰国。

。小林敦子助手（東方面）は、文部省在外
研究員として六月一八日伊丹発、スタン
フォード大学、コロンビア大学、ハー
バード大学、ロンドン大学、オックスフ
ード大学、ケンブリッジ大学に於いて
欧米における中国研究文献調査を行い一
九九〇年三月三十一日帰国。

。桑山正進教授（東方面）は、六月二八日
伊丹発、フランス、ギメ博物館に於いて
開催の第一〇回南アジア考古学会に出席
して七月八日帰国。

。鈴木啓司助手（西洋部）は、七月一日成
田発、ビシー、パリにおいて、フランス
語・フランス文化研修に出席し、パリ国
立図書館、パリ第七大学に於いて、フラ
ンス文学に関する研究調査を行い九月二
〇日帰国。

。岩熊幸男助手（西洋部）は、七月二三日
成田発、サルティコフ・シチエドリン図
書館、パリ国立図書館、レアル図書館、
バイエルン州立図書館に於いて、中世論
理学に関するラテン語写本閲覧を行い八
月二八日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、文部省科学研

究費補助金により、八月二〇日伊丹発、
デリー市内、ファルガム周辺、ピカネー
ル周辺でインド亜大陸における雑穀栽培
とそれをめぐる農牧複合の研究を終え九
月一九日帰国。

。高田時雄助教授（東方面）は、九月二日
伊丹発、ヘルシンキ大学、ソ連東洋学研
究所に於いて敦煌文書の調査、研究を行
い九月二二日帰国。

。狭間直樹教授（東方面）は、文部省在学
研究員として九月一日成田発、パリ第
七大学、コロンビア大学、ハーバード大
学、連邦議会図書館に於いて、欧米にお
ける中国近、現代史の研究を終え一〇月
六日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科
学研究費補助金により、九月一五日伊丹
発、デリー、マドラスに於いてガンジス
河流域の複合文化形成動因の比較研究を
終え一一月三日帰国。

。田中 淡助教授（東方面）は、九月二〇
日伊丹発、台北市に於いて第一回中国飲
食文化學術研討会に出席、講演を行い九
月二六日帰国。

。山室信一助教授（日本部）は、九月三〇

日伊丹発、北京日本学研究中心に於
いて、日本語教育、日本語教育に関する
研究及び指導を行い、一九九〇年一月二
八日帰国。

。阪上 孝教授（西洋部）は、一一月一日
伊丹発、フランス国立文書館、国立図書
館、パリ市立文書院に於いて文化革命と
してのフランス革命の研究を行い一九九
〇年四月二二日帰国予定。

。曾布川 寛助教授（東方面）は、一一月
一六日伊丹発、台湾故宫博物院、中央研
究院、台湾大学に於いて中国美術の調査
及び資料収集を行い一一月二二日帰国。

外国人研究員

。Harold Bolinbo ハーバード大学教授

一八世紀日本における社会状況の解明

受入教官 藤井助教授

期間 二月一日～八月三〇日

。James McMullen オックスフォード大
学講師

前期江戸時代儒学の研究

受入教官 横山助教授

期間 九月二〇日～

一九九〇年三月二〇日

。孫 昌武 南開大学教授

中国中世における宗教と文学の交渉についての研究

受入教官 小南教授

期間 一月七日～七月六日

。Michael Witzel ハーバード大学教授

ヒンドゥーイズムの形成主体と伝播・ヴェーダ学派の伝承と地域分布

受入教官 井狩教授

期間 九月一日～

一九九〇年八月三十一日

招へい外国人学者

。Wm. Theodore de Bary ロンビア大

学教授

新儒教の研究

受入教官 磯波教授

期間 三月二日～七月二七日

。曲 翰章 中国社会科学院文献情報中心
副編審

日本および中国の漢字政策の研究

日本社会に於ける漢字使用状況と情報

処理の調査

受入教官 高田助教授

期間 五月八日～八月八日

。官 文娜 武漢市中南民族学院講師

日本近代文化史に関する研究

受入教官 飛鳥井教授

期間 一〇月一日～

一九九〇年九月三〇日

。James L. McClain ブラウン大学助教
授

近世前期都市行政と庶民生活について

の研究

受入教官 横山助教授

期間 一一月一日～

一九九〇年七月一日

外国人共同研究者

。Gerard Fussman フレージュ・ド・フ

ランス教授

北西インドにおける仏教彫刻および碑

銘の研究

受入教官 桑山教授

期間 四月三日～五月二日

。Aurora Testa イタリア東アジア研究所

研究員

唐代の鏡の考古学的研究

受入教官 桑山教授

期間 七月一三日～一〇月一二日

外国人研修員

。Mesnil Evelynne パリ第七大学院生

五代四川仏教と道教絵画

指導教官 荒井教授

期間 四月一日～

一九九〇年三月三十一日

。吳 来 北京外国語学院日本学研究セ
ンター学生

古代日本人の宗教思想の一側面―「竹

取物語」に見える神仙信仰をめぐって―

指導教官 麩谷助教授

期間 三月一五日～八月一四日

。Eric Laurent パリ第七大学院生

日本における民族動物学

指導教官 谷 教授

期間 一〇月一日～

一九九〇年三月三十一日

。Richard Porunski フランス国立東洋

言語文明研究所博士課程

現代の日本社会と社会変化、社会変化

の過程とその要因

指導教官 谷 教授

期間 一〇月一日

一九九〇年三月三十一日

賀 躍夫 中山大学博士研究生

清末民初中国的社会思潮変遷与日本

指導教官 狭間教授

期間 一〇月二日

一九九〇年一〇月一日

Julia A. Nakano ハワイ大学大学院生

近代日本茶道の歴史—古田織部と大名

茶及びお伽衆についての研究—

指導教官 飛鳥井教授

期間 一一月二日

一九九〇年九月一日

東洋学文献センター講習会

。一九八九年度漢籍担当職員講習会

「漢籍電算処理」は、本学大型計算機

センターの協力を得て、一〇月二日から

同月六日まで次の通り行われた。

二日 人文科学とデータベース(講演)

大型計算機センター教授 星野 聡

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

(講義) データベースについて(講義) 勝村哲也

大型計算機センター助手 萩野達也

計算機処理入門(講義)

大型計算機センター技官 隈元栄子

三日 ALA文字と東南アジア言語処理

(講義)

大阪国際大学助教授 柴山 守

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

(講義) 都築澄子

東洋学文献類目の計算機処理(講義)

大型計算機センター技官 河野 典

学術情報ネットワーク(講義)

大型計算機センター技官 桜井恒正

データベース検索(一)(実習)

四日 知識情報処理(講義)

大型計算機センター助教授 松本裕治

データベース検索(二)(実習)

五日 エキスパートシステムと情報検索

(講義)

大型計算機センター助教授 大西 淳

学内ネットワーク(講義)

大型計算機センター助教授 金沢正憲

データベース検索(三)(実習)

六日 附属図書館見学

大型計算機センター見学

漢字コードの話(講義)

大型計算機センター技官 小沢義明

。一九八九年度漢籍担当職員講習会

「初級」は、一一月六日から同月一一日

まで、次の通り行われた。

六日 漢籍(講義)

目録法(Ⅰ)(講義) 梅原 郁

七日 目録法(Ⅱ)(講義) 田中久子

四部分類(講義) 田中久子

八日 経・子部書(講義) 井波陵一

実習(一) 高田時雄

九日 史部書(講義) 佐原康夫

実習(二)

一〇日 新学書(講義) 勝村哲也

実習(三)

一一日 質疑応答

講演会

。一九八九年九月一二日 於 西館会議室

近代初期英国の礼儀作法

オックスフォード大学コーパス・クリ

スティ学寮長 Sir Keith Thomas

主催 共同研究班「家族とハウスホー

ルドの比較史的研究」・「貝原益軒とその時代」

。一九八九年四月一八日 於 西館会議室
イタリヤ・ルネサンスの人類学的研究
ケンブリッジ大学助教授

Peter Burke

。一九八九年五月一九日 於 西館会議室
フランス革命—論争と現代的意味
エコール・ポリテクニク教授

Jean-Marie Domenach

。一九八九年七月一七日 於 西館会議室
Talking Cultureと民族誌学の現在
カリフォルニア大学ロサンゼルス
校教授 Michael Moerman



お客さま

一月一〇日 復旦大学中文系教授

同右 副教授

李 江 巨 平 栄

一月二〇日 慶北大学教師範大学歴史教育科副教授張 東翼
一月二四日 ユーゴスラヴィア国ザグレブ大学社会学部教授

Vjeran Katunarić

同国クロアチア文化研究所所員

Miroslav Tudman

二月一〇日 四川大学宗教研究所長

郷 希 泰

二月一六日 四川省社会科学院哲学・文化研究所所長陳 徳述

池 明 烈

四月一二日 北京科技大學教授

柯 俊

四月一四日 ヨルダン大学長

Abdul Salam Majali

五月一九日 フランス・理工科学学校教授

Jean-Marie Domenach

五月二六日 中国社会科学院政治学研究所

白 銅

他 二 名

六月二四日 四川省社会科学院哲学・文化研究所所員李 遠国

六月三〇日 北京大学教授

湯 一 介

中国科学院生物物理研究所員

梁 培 寛

一〇月二七日 中国社会科学院近代史研究所副研究員張 允侯

〔一九二〇年代の中国〕班で講演のため

十一月 四日 復旦大学歴史学部教授

湯 網

助教授

〃 〃

十一月一〇日 広東社会科学院研究員

〔一九二〇年代の中国〕班で講演のため

楊 立 強
楊 正 泰
葛 劍 雄
李 時 岳

概念体系と用語の再検討を

めざして

——家族とハウスホルドの
比較史的研究班——

江川 温

ある社会の特質を考える上で、そこでの親族関係および共住集団（世帯、ハウスホルド）のあり様をさぐることは、もっとも基本的な課題のひとつといつてよい。親族のうちでも家族と称される集団は、いづばんに性、生殖、扶養、生産、消費にかかわる機能を持ち、特に濃密な感情的紐帯で結ばれている。そして大多数の人間は人生のうちで、家族との長期にわたる共住生活を経験する。しかし家族形態の多様性を考えるならば、これをより広い親族関係からきりはなして独立の単位として扱うことには問題がある。他方で家族はその一部が別居することがあり、また前近代の多くの社会では非親族の共住の慣習が広く認められるので、共住集団は家族には等置できない。しかしいづばんには後者が前者の核となっていることも認めざるをえない。こうして親族、家族、共住集団の諸問題は分かちがたく絡みあっているのであるが、研究会のテーマは

これらを総合的に包みこむ。

かつてこうした問題に大きな関心を払ったのは、歴史学者というよりは社会科学者であった。かれらは「家父長制大家族」から「夫婦家族」という進化（もしくは墮落）の仮説をうちたてたのである。のちには歴史学のなかにも、社会科学との接近に応じてこうした見方がはいりこんできた。ただし歴史学内部の各専門領域の閉鎖性によって、「家父長制大家族」のような概念は、收拾のつかないまでに多様化したのであるが。

現在では歴史人口学の発展と生活史、女性史への関心の増大のなかで、家族と世帯の問題は歴史研究の焦点のひとつとなってきた。そのなかで、かつての社会科学者たちのパースペクティヴについては、多くの実証的研究がこれに疑問を投げかけた。他方でいくらかの研究者たちは、親子とか夫婦とかいった関係にまつわる心性が時代とともに大きく変化していることを主張した。もちろんこうした研究や主張には反論もあり、活気にみちた混乱がこの分野を支配しているのである。

新しく研究を進めるに当たって、ひとつのキー・ポイントとなるのは用語と概念の問題であると思われる。歴史研究者はいづばんに「他の時代」についての発言

を禁欲しがちであるが、この美風(?)は、概念体系の特殊化と、用語のジャーゴン化をも生んできた。いま、家族と世帯の研究がさしかかっているのは、既製の概念体系の全面的見直しが要請されるような局面なのである。それは用語の再検討も促さずにはおかぬ。他の時代や地域の専門家との対話の機会は、そのための有益なヒントを与えてくれるだろう。共同研究の意義はそこに求められるのである。

礼——かたちの文化

——中国古代礼制研究班——

小 南 一 郎

「礼記」表記篇に次のように言う、「殷人^{いんじん}は神を尊び、民を率いて以て神に事^{つか}え、鬼を先にし礼を後にす……周人^{しゅうじん}は礼を尊^{とと}び施^せを尚^{とと}び、鬼に事^{つか}え神を敬してこれを遠^{とほ}ざく」と。ここに、殷人にとつての神が周人にとつては礼であつたと、対比的に述べられていることから、礼とは、人間の宗教的な行動と、ある面で重なり合いながらも、それに取って代わるものであつたことが知られる。

人間の活動に対し、ごく一般的に言つて、時代を遡れば遡るほど、宗教からの規制が強く、人々はそうし

た規制と戦いつつ、神から自立した、世界内での人間の位置を築いて来たのであつた(そうして、実存主義の哲学に象徴的に見られるように、神が存在しないことに途方に暮れているのが、近代の精神だと言えようか)。こうした、神からの自立の歴史を典型的に示すのが西欧的な無神論の系譜であるとすれば、中国の人々(少なくとも士大夫たち)が宗教から自由になつたのは、いささか違つた経路を通してであつた。西欧においては、中世の神学者や哲学者たちが神の存在を証明したのと同様の精神で、近世の思想家たちは神の非存在を論理的に明らかにしようとしたのであるが、中国においては、きわめて古い時期に、神は存在するか否かという、やっかいな問題を問うことをやめたのであつた。「敬してこれを遠^{とほ}ざける」という言い方が、神の存在をあえて問わないとする方針を端的に示している。

「論語」に、「祭りはいますが如くす。神を祭るに、神いますが如くす」とある。神々は鄭重に祭らなければならぬと説かれているのであるが、ここで、神が祭祀の場に降臨しているから誠意を尽くせとは言わず、神がいますが「如く」祭れと指示されるとき、神の存在はどこかに行つてしまひ、祭る者の態度だけに目が注がれているのである。祖先祭祀は、言うまでもなく

中国における宗教活動の中核を成すのではあるが、少なくとも士大夫の家にあっては、その祭祀の場に、ほんとうに祖先の靈魂がやって来て祭祀を享けるのかどうかは、問うてはならないことであつた。おそらく、それを問えば、果てしない議論の泥沼に陥るであろうことを知った上での「賢明な」選択であつた。このような選択の上での、祭られる主体がいるかどうかを不明にしたままで行われる祭祀は、結局、かたちだけが重視されるものとならざるを得なかつた。その、宗教性を捨象したかたちこそが、礼なのだと言えるであらう。

かたちの重視と言うと、わが国ではいささか価値の低いものだという事にならう（かたちはどうでもいい、精神こそ大切だと、すぐ誰かが言い出しそうである）。中国の礼制度の背後にあつた考え方は、それと大きく異なつていた。いかなる精神も、それが正しくかたちに表わされぬかぎり無意味だとされたのである。たとえば、「儀礼」の士昏礼の中に、婚礼の日、花嫁は花嫁の家まで迎えに行くと、花嫁の馬車を、車輪が三回まわるまで御したあと、御者にたづなを渡すところ。花嫁を迎える気持ち、短い距離であれ、その車を御することによって表わすのである。

「礼記」になると、礼の精神といったことが盛んに

説かれ、哲学化が行なわれるが、元来の礼は、そうした七面倒くさい議論と別の、かたちを信頼し、行動のかたちを介して結びついている人々の間の共通の約束ごとであつたに違いない。

鬱にして快

——貝原益軒とその時代研究班——

横山俊夫

イギリスの友人から、近刊の自伝が届いた。曰く、世に両族あり、人生を楽しむ族と、忍ぶ族となり、両者の溝を橋渡す者はなきや、と。益軒の共同研究が始まつていらい、五里の霧いまだ晴れぬまに届いたこの本が、ヒントをくれた。益軒は、口を開けば恐れよ慎めよと、ウルサイ親爺である。ところが、一八世紀からつい最近まで、日本の社会にもっとも強く根をはつた思想家を選ぶとせよ。益軒の名は、最終選考まで残るにちがいない。その長命ぶりは何か。益軒先生と耳にしただけで、五体をめぐる喜びがあつたのか。たとえば、人生を耐えながら同時に嬉しがるような。

こんなことでも思わずにはおれぬほど面倒な輪読が続いている。発足後二年。毎週月曜朝の通勤電車に揉まれて、よくぞまめまめしく集うたものと感心。おの

おの、かわりある分野は、日・韓・中・独・仏・蘭・英・米と、狭くはない。しかしそれとて、益軒を遠く近く縦横に眺めるには不足の感あり。イスラム学や印度教学、現代医学や生物学からの応援も欲しい。ともあれ、二百部にあまる益軒の著述全体と対面するのは、誰しも初めてのこと。まず漢文をば楽しまんとて、『大和本草』冒頭と『大疑録』上巻をとりあげた。オオ、なんと豊かな古典の引用。では、和文のものにてひと息つかんと、『君子訓』に進めば、これまた『古人曰く』の連発。思わず「オリジナリティあり哉」の声。そは近代のさかしらなる愚問と、氣をとり直し、身近かなところへ。『京城勝覧』のガイドブックとしての信頼度をば現存史料で校閲してくれん。洛中は及第。ただその足が班員諸賢の蟠踞する洛外へと赴けば、俄然評点が厳しくなった。勇んで、『慎思録』の未刊の巻「養生」に挑めば、四十路を越えたる小生など、自ずと我身をいたわるの心を増し、言語も酒食も減じ、風呂も「氣」の減らぬよう十日に一度とやせんなどと、深刻。

あれこれ首を突込むほどに、しだいに何かが見え始めた。それは、益軒が生きた時代そのものと言ってよい。戦乱や変革の記憶が遠のき、世が大枠では動かぬものとなった時、弱々しき人間の生が、どのようなか

たちで充足させられるかということのほうが、氣にかかりだしていた時代である。益軒が語りかけた読者の範囲が広がっただけ、そのような時代の諸相もまた、益軒のことばに映じている。左様、憂鬱にして愉快なる世——ハイテク革命の次にくる時代を予感させられているのは、小生だけではなさそうだ。

北京の春

森 時 彦

四月二十九日、「千載一遇」の思いをいだきながら、二年半ぶりの北京空港におりたった。

五月四日は五四運動七十周年にあたる。この日を記念して、中国社会科学院主催の学術討論会が、五・七日の三日間、建国門外の該院ホールで開かれた。国外二十数名、国内九十数名の参加者のうち、京都からは小野信爾氏、狭間直樹氏そしてわたくしの三名がまねかれた。

シンポジウムもさることながら、わたくしたちは当面の学生運動のゆくえに、大きな関心をもっていた。年初の頃からすでに、ある中国の友人は、「今年の五月四日には、きっと何かおこりますよ」と耳うちしていた。四月十五日の胡耀邦逝去以後、マスコミの伝える北京学生界の動きは、この予言をうらがきしつづあった。

ところが出てきてくださった友人をはじめ、多くの



人々は異口同音に「たぶん五月四日はデモもないでしょう」と、意外な見通しを表明された。

学生運動を動乱と締めつけた四月二十六日の『人民日報』社説は、七十年前のパリ講和会議の消息が五四運動を惹起したのと同じように、運動を一举にエスカレートさせた。翌二十七日の抗議デモは、決死の反撃だったように、参加学生の多くは前夜、遺書を認めたという。乾坤一擲の挙にでた学生の勢いにおされて、北京政府も学生たちとの対話を約し、一定の空気ぬきをはかった。このたびの運動は、二十七日の大デモの成功で、峠をこしたというのが、二十九日段階における北京の人々の観測だったのだ。

物理的にいっても、たとえば北京大学の場合、朝八時に出発したデモ隊が、天安門広場から帰学したのは、すでに翌日の午前二時だった。学生食堂の労働者が食事を用意してまうちうけ、疲れはてた学生をねぎらったという美談もあるが、このようなマラソン・デモをそうくりかえせるはずがない。

しかし五四前夜になると、かの友人たちは一転して「明日は必ずデモがありますよ」とこれまた異口同音に教えてくれた。二十九日テレビ放映された対話なるものは、官製の旧学生会代表を國務院辦公室主任袁木らが適当にあしらう底のものだった。五月三日の外国人記者招

待会での袁木の発言は、とりわけ不快感を与えた。

はたして、五月四日は早朝から方に近い群衆が、立入禁止になった天安門広場をとりかこみ、あたかもサッカーの試合開始をまつ観衆のように、デモ隊の入場をまちかまえていた。白石橋あたりが今日の天王山になるとみこんで、十時ごろにかけつけてみたが、デモ隊の数におされて、警官隊も早々と阻止線をといてひきあげていった。

四月二十七日とはうってかわって、学生たちの顔に悲壮感はなかった。四月十五日以来の三週間にわたる運動にピリオドをうつ盛大な儀式という感さえあった。事実、翌五日にはスト解除の宣言が発せられた。七日に、旧知の南開大学の先生がシンポジウム会場までわざわざたずねてくださったが、明日から授業再開とのことで、ほとんど旧交をあたたためる間もなく、天津にとんぼがえりされた。

わたくしたちも、五月八日に後髪をひかれながら北京を離れた。北京大学を中心とする学生たちが、ゴルバチョフの北京訪問に照準をあわせ、絶食という起死回生策で運動の再構築をはかったのは、その五日後のことだった。

ターバンを脱ぎすてた シク教徒

田 中 雅 一

一九八九年十月三十一日早朝、飛行機で調査地のマドラスを離れ、昼前にニューデリーに着いた。日本を離れてから約一月半、帰国まで数日を残す限りである。タクシーを拾い目指す市街の中心部にあるホテルに向かう。ふとしたことから、タクシーの運転手がシク教徒であることを気づいた。シクたちは大きなターバンを頭に巻いているからすぐ分かるはずなのだが、かれはシク教徒のシンボルであるターバンを着けていなかった。それどころか短髪で髭をそっているため他の人と全く区別がつかない。

わたしは座りなおして、「あの十月三十一日はどこにいた。家はどこだ。家族は大丈夫だったか。」とやつぎばやに尋ねた。

インドの少数派であるシク教徒たちにとって、十月三十一日は特別な日である。五年前のその日、インディラ・ガンジー首相の暗殺に引き続いて起こった暴動のた

めに、二千人以上のシクが虐殺されたのである。

一九八〇年代に入ってから、インドからの独立を要求するシク教徒の活動が激しくなった。だが、ガンジーは強硬な態度を崩さず、一九八四年の六月にシク教徒の聖地、アムリツタル（アムリトサル）の黄金寺院にたて籠る過激派たちを総攻撃するように軍に命令を下した。そして激しい銃撃戦の末、シクの過激派たちの多くが殺された。それから数カ月後、アムリツタル襲撃の復讐を誓ったシクの凶弾によって、ガンジーは倒れたのである。

かの女が息をひきとった病院には、ヒンドゥ教徒だけではなく、その容態を心配するシク教徒たちも集まってきた。かれらは、明らかにシク対ヒンドゥという絶対的な図式でものごとを見てはいなかった。すくなくとも、ガンジーは全シク教徒の敵として死んだものではなかったのである。したがってかれらは、その後数時間してから、シクを虐殺せよという叫び声が上がろうとは夢にも思わなかったのである。

ガンジー首相暗殺から数日にわたって行なわれたシク狩りは凄惨なものであった。壮年の男たちは虫けらのように殺され、少年たちは去勢された。女たちは、夫の見える前で犯された。

ニューデリーの飛行場で拾ったタクシーの運転手は、

この虐殺をきっかけにターバンを脱いだという。新たな虐殺を恐れてのことである。

一九九〇年代は、イデオロギー戦争ではなく民族抗争の時代であるという。国の大小を問わず、各地で痛ましい事件がおきている。今回のインドへの旅で、民族のシンボルを無化させる暴力の恐ろしさをあらためて思い知らされた。

ナポリへの旅

甚野 尚志

ドイツに留学して、修道院のような研究所と独房のような住居を往復する生活に厭きた私は、早春に、陽光を求めて、車でナポリへと旅した。ゲッティンゲンからアウトバーンを一路南へ下ると、同じドイツといっても風景はかなり変容する。平坦で起伏の少ない、あざやかな緑色をした森の風景が、木々も黒く山も険しいバイエルン地方のそれになる頃には、もうオーストリア国境である。そして冬季オリンピックの地インスブルックへと抜けて、万年雪を冠したアルプスの霊峰へ向かって走り、名にし負う関所ブレンナー峠を越えれば、そこはもうイ

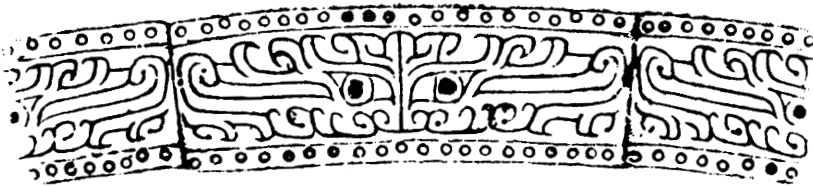
タリアだ。それからヴェローナあたりまで、道路は谷ぞいをうねりながら、溪流にそって下っていく。さらにローマあたりまでは、ぶどう畑が点在する乾燥した山ありを、砂塵が舞い上がるなか走らねばならない。だがローマを過ぎると、周囲の雰囲気も人々の様子も変わる。まさに荒涼とした不毛の土地へと足を踏み入れたようだ。真新しい高速道路がどこまでも一直線に続き、しばらく単調すぎる運転で眠気がさしてくる頃にナポリに到達する。

ナポリの町に入れば、誰しもその喧噪と無秩序に圧倒されるだろう。まず驚くのは、車が信号を守らず、縦横無尽に走っていることだ。道路上には違法駐車車があふれ、しばしば車が通れない道もあるほどだ。ナポリに車でやってきた私は、交通規則というのが、人間の作ったフィクションにすぎないことを身にしみて感じた。交通規則は無視されるが、ここで事故がさして多くないのは、車同士が相手の動きを巧みに察知して、どちらが進むべきかを互いの呼吸で判断しているからだだろう。これはナポリの人々が、近代人がとうに失ってしまった人間の共生の作法をまだどこかに残しているからだだろうか。

泊まったホテルでイタリア語しか通じなかったのは仕方なかったとしても、隣室の客がイスラムのお祈りをしたり、外の人々が大声で話しているのが恣意しに聞こえ

てくるのには閉口した。極め付きは、泊まった初日の晩、深夜一時頃、何の予告もなく突然に部屋の鍵が開けられ、警官が入ってきたことだ。密入国者がいないか確かめるためだと言っていたが、この時ばかりは一瞬何がおこったのかわからず、ただ喫驚した。

陽気な人々が織りなす喧噪に満ちた活気と対照的なのは、ナポリを取りまく風光明媚な自然環境であらう。ナポリ湾から果てしなく広がる紺碧のわたつみ、熱帯の楽園を彷彿とさせるカプリ島の白い家並、太古よりその偉容を誇るヴェスビオ火山など、見るべき所は数多い。カプリ島へ向かうフェリーの上で、潮風に吹かれながら私は、ナポリの町には海の青がよく似合うとひとり感慨にふけた。



書いたもの一覧

一九八九年一月～一九八九年二月(五十音順) ●は単行本

・飛鳥井 雅道

近代文化と天皇
連続か断絶か

東京新聞 一月九日
朝日ジャーナル 一月二五日

●明治大帝

鉄斎の生きた時代

筑摩書房 一月
別冊墨一〇号 三月

書評・亀井俊介「西洋が見えてきたころ」不死鳥五八号 三月
前田愛さんの「八大伝」前田愛著作集第二巻 月報

平野謙・人と作品 昭和文学全集一七巻解説

筑摩書房 五月
小学館 六月
三一書房 七月

●天皇と近代日本精神史

天皇制になぜこだわるか

現代の理論 一二月

・荒井 健

李義山七律集稿(七)(共筆) 東方学報 京都六一冊 三月

「開城」周辺(二)——「清華園日記 西行日記」—— 鷗風 二二号 七月

・新井 晋司

張衡「渾儀注」「渾儀図注」再考 山田慶兒編「中国古代科学史論」 京都大学人文科学研究所 三月

・井 狩 彌 介

ヴェーダ祭式文献にみられる再生観念の諸相

人文学報 65号 三月

ヴェーダ祭式の思考と世界観 岩波講座・東洋思想「インド思想3」 岩波書店 九月

ヒンドゥー世界における浄・不浄の観念(座談会) 岩波講座・東洋思想「インド思想3」 岩波書店 九月

Some Aspects of the Idea of Rebirth in Vedic Literature

インド思想史研究6(服部正明博士退官記念論集)

インド思想史研究会 一一月

・井上 進

漢学の成立 東方学報 京都六一冊 三月

張氏顧亭林先生年譜補正 岩見宏・谷口規矩雄編「明末清初期の研究」 京都大学人文科学研究所 三月

・宇佐美 斉

桑原武夫先生の思い出 アサヒグラフ 一月

●落日論

翻訳・サ・イラ、最高存在の讃歌 河野健二編「資料フランス革命」 筑摩書房 六月

フランス近代詩と落日 岩波書店 六月

開かれた評伝 シコウシテ 21号 九月

柱時計のふたつの顔 すばる 一〇月

世紀末をめぐる 産経新聞(夕刊) 一二月一四日

・梅原 郁

●続資治通鑑長編語彙索引

南宋兩稅制度雜攷 中村賢二郎編「國家—理念と制度」

京都大学人文科学研究所 三月

中国都市城壁のイメージ「イスラムの都市性・研究報告」二八

三月

書評・熊本崇「熙寧年間の察訪使」

法制史研究 38 三月

司馬光・王安石・蘇軾

週刊朝日百科・世界の歴史 43 朝日新聞社 九月

宋代の郷司—その位置づけをめぐる—「劉子健博士頌壽記念

宋史研究論集」

同朋舎 九月

消えたミドリシジミ

健康 八九—一一 一一月

・大浦 康介

Aspects du roman journal français

ヨーロッパ文学研究 一一号 三月

●Kenji Nakagami, *La Mer aux arbres morts* (Paris : Fayard /

共訳)

八月

・奥村 弘

地域社会の変容と地方自治要求—府県会の特質とそれをめぐる

政治動向を中心に—土佐自由民権研究会編「自由は土佐の

山間より」

三省堂 五月

忘れられた自由民権運動指導者「中井城太郎」—略伝と史料紹

介—新宮町文化財報告 一二号 一〇月

近代国家形成期における地域社会把握の方法について—水林彪

氏の研究を手掛かりとして—日本史研究 三二六号 一〇月

一九八九年歴史学研究会大会報告批判(近代史部会簡井・藤田

報告)

歴史学研究 六〇一号 一二月

・桑山 正進

七世紀におけるベグラームの存立

西南アジア研究 三〇号 三月

Lama and Tapa Shotor : Aspects of the Stupa Court

at Hadda. *Annali d'Istituto Universitario Orientale di Napoli*,

Vol. 47, fasc. 2 (1987).

六月

How Xuanzang Learned about Nalanda. *Tang China and*

her Neighbours : Studies on East Asia from the 7th to the 10th

Centuries. The Institute of East Asian Studies : Essays, Vol. 1,

(1988). Scuola di Studi sull'Asia Orientale (Sezione dell'

Istituto Italiano di Cultura), Kyoto.

八月

書評・Marc Le Berre, *Monuments pré-islamiques de l'Hindukush*

central. Memoires de la Délégation archéologique française

en Afghanistan, tome 24. Editions Recherche sur les Civil-

sations, Paris, 1987.

オリエンタル 三二卷一号 九月

・小南 一郎

壺型の宇宙

東方学報 京都六一冊 三月

●陳寿「三國志Ⅲ」(世界古典文学全集 24 c)

筑摩書房 四月

地獄めぐりの語り手たち

説話伝承学会編「説話と伝承者(説話伝承学 89)」

説話伝承学会編「説話と伝承者(説話伝承学 89)」

平凡社 九月

●張光直「中国青銅時代」(共訳)

感応／太山府君／冥官／冥報記／洛陽伽藍記

「岩波仏教辞典」

岩波書店 一二月

・阪上 孝

国家の近代化 河野健二「フランス革命二〇〇年」

日本放送出版協会 四月

●資料 フランス革命（共訳）

社会思想史にとつてのフランス革命 岩波書店 七月

保険をつうじて考えること 創造的市民 二一号 八月

・佐々木 克 近江の志士城多董と水戸藩士 「茨城県史料」付録二三 三月

共同研究の風景 史苑 四九卷二号 九月

天皇とマリアンヌ 「歴史誕生」1 角川書店 一二月

・佐原 康夫 漢代の官衙と属吏について 東方学報 京都六一冊 三月

居延漢簡月俸考 古史春秋 五号 三月

居延漢簡月俸考（發表要旨） 秦漢史論叢 第四輯 西北大学出版社 五月

秦漢陶文考 古代文化 四一卷一一号 一一月

・甚野 尚志 マックス・プランク歴史研究所について

クリオ（東大・クリオの会） 第三号 一九八八年一二月

「シュピーゲル」の日本特集によせて

日独文化研究所所報（京都日独文化研究所） 二七号 一月

初期スコラ学期の「君主鑑」における徳と政治 中村賢二郎編

「国家—理念と制度」

京都大学人文科学研究所 三月

・新保 敦子

現代中国社会における社会変動と人間形成

岩波講座現代中国 第三卷 岩波書店 一二月

Why is school no longer attractive: An analysis of the

increasing school dropouts in rural China and its socio-

economic content. *Asian Education in Transition*. 一一月

・鈴木 啓司

ペラダン論Ⅰ—「暴民政治の芸術」における「デカダンス」

人文学報 64号 三月

・曾布川 寛

中国古代の山岳信仰 「アジアの宇宙観」 講談社 一月

陵墓制度和靈魂観（喪風記） 文博 一九八九年二期 三月

六博の人物坐像銅鎮と博局紋について 古史春秋 五号 三月

任伯年から呉昌碩へ 「中国近現代絵画」 渋谷区立松濤美術館 六月

・高田 時雄

漢文の将来と伝典 中外日報 一月

玉篇の敦煌本・補遺 人文 京都大学教養部 三月

廃紙に金を掏う 三省堂ぶつくれつと 三月

「中国少数民族語言簡志叢書」紹介 月刊言語 七月

・田中 淡

大河を治めた英雄たち—古代中国の水利—

週刊朝日百科・世界の歴史15 朝日新聞社 二月

『墨子』城守諸篇の築城工程 山田慶兒編「中国古代科学史論」 京都大学人文科学研究所 三月

地方志文献に現われた赤山とその周辺

「中国山東省赤山法花院」 赤山法花院研究会 四月

北朝壁画にみえる城

週刊朝日百科・世界の歴史26 朝日新聞社 五月

●中国建築史の研究

中国建築の設計マニュアル—李誠の『营造法式』— 弘文堂 七月

週刊朝日百科・世界の歴史50 朝日新聞社 一月

入母屋造／伽藍／瓦／間／寺院建築／塔／その他

「岩波仏教辞典」 岩波書店 一二月

・田 中 雅 一

カーリー女神の変貌—スリランカ・タミル漁村における村落祭祀の研究— 国立民族学博物館研究報告 一三卷三号 一月

「オミズヨオミズ、コノヨデイチバンミニクイノハダーレ？」

(インド映画の世界を探る) 民博通信 四三号 一月

書評・小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦編「社会人類学の可能性

Ⅱ 象徴と権力」 民族学研究 五三卷四号 三月

スリランカ、タミル漁村の憑依 宗教研究 六二卷四号 三月

〈シンポジウム〉フィールドからわかるということコメント3

季刊人類学 二〇巻三号 九月

クリシュナーからクリシュナへ—スリランカ・タミル漁村にお

ける女神崇拜の「サンスクリット化」をめぐる—

南アジア研究 一号 一〇月

ヒンドゥ奉納儀礼の研究—カーヴァディとそのコンテクスト—

田辺繁治編著「人類学的認識の冒険—イデオロギーとブラク

ティス—」 同文館 一〇月

・谷 泰

The geographical distribution and function of sheep flock

leaders : a cultural aspect of the man-domesticated animal

relationship in southwestern Eurasia.

in : J. Clutton-Brock (ed.) *The Walking Larder*.

Unwin & Hyman. 一月

笑いのコミュニケーション上の機能—欺瞞と錯誤のあいだ—

糸魚川直祐・日高敏隆編「ヒューマン・エソロジー」

福村出版 三月

Group organization and herding techniques of the Bakalwal

in Kashmir.

in : S. Sakamoto (ed.), *A Preliminary Report of the Studies on*

Millet-cultivation and its Agro-Pastoral Culture Complex in the

Indian Subcontinent, II (1987, Kyoto Univ. 四月

コミュニケーション能力の進化—チンパンジーの笑いが示

唆するもの—

江原昭善編「サルはどこまで人間か」 小学館 一一月

ノアの子孫の食卓—旧約五書における食規定の語り口分析—

季刊人類学 二〇巻四号 一二月

・谷 山 正道

国訴研究の動向と問題点

新しい歴史学のために 一九四号 三月

●川上村史通史編(共同執筆) 奈良県吉野郡川上村 三月

●図説広島市史 広島市 四月

書評・水本邦彦著「近世の村社会と国家」 日本史研究 三三二号 六月

●塚本 明 町抱えと都市支配―近世京都の髮結・町用人・「年行事」を中心に― 日本史研究 三三一号 五月

近世京都の下級警察機構―「年行事」の役務・組織構造を中心部に― 部洛問題研究 一〇二号 十一月

●磯波 護 秦と漢の天下統一(朝日百科・世界の歴史11) 朝日新聞社 二月

宮崎市定「古代大和朝廷」 ちくま二一五 筑摩書房 二月

●要解 世界の歴史(共著) 儒教国家の誕生(朝日百科・世界の歴史16) 朝日新聞社 三月

唐代の辺境における金銀(中国辺境社会の歴史的研究) 京都大学文学部 三月

三国志の世界(朝日百科・世界の歴史21) 朝日新聞社 四月

南北朝と仏教文化(朝日百科・世界の歴史26) 朝日新聞社 五月

隋、唐の律令国家(朝日百科・世界の歴史31) 朝日新聞社 六月

書評 J・A・フォォーゲル著、井上裕正訳「内藤湖南」 朝日新聞社 六月

日本経済新聞 七月九日

藩鎮割拠の時代(朝日百科・世界の歴史36) 朝日新聞社 七月

黄巢と馮道(朝日百科・世界の歴史38) 朝日新聞社 八月

文治国家の宋王朝(朝日百科・世界の歴史41) 朝日新聞社 九月

宮崎市定「東洋における素朴主義の民族と文明主義の社会」(東洋文庫) 解題 平凡社 九月

征服王朝に威圧される宋(朝日百科・世界の歴史46) 朝日新聞社 一〇月

書評・井波律子著「読切り三国志」 産経新聞夕刊 一〇月三〇日

モンゴル族の元王朝(朝日百科・世界の歴史51) 朝日新聞社 十一月

元から明への交代(朝日百科・世界の歴史56) 朝日新聞社 十二月

三武一宗の法難／法難 「岩波仏教辞典」 岩波書店 十二月

●富永茂樹 シンボルとイメージの革命 河野健二「フランス革命二〇〇年」日本放送出版協会 四月

●学問の現在(共編) 理性の夢―革命と科学 京都新聞 五月二五日

●資料 フランス革命(共訳) 廃墟のある風景 横山俊夫・藤井譲治編「安定期社会における人生の諸相―老人と子供」 京都ゼミナールハウス 一〇月

書評・樋口陽一「自由と国家」 共同通信配信各紙 一二月

・永田英正

砂塵の中の攻防―冒頓単于・武帝―

週刊朝日百科・世界の歴史13 二月

研究ノート・漢代官吏の官秩にみる文官優位について

滋賀史学会誌 七号 二月

●居延漢簡の研究

・狭間直樹

日本学者对中国五四運動的研究(韓鳳琴訳)

党史通訊 一九八六年七期 七月

何天炯与孫中山(共著) 興寧文史 一〇輯 何天炯先生紀念

專輯(歴史研究 一九八七年五期原載) 一九八八年六月

五四運動の精神的前提―渾代英のアナキズムの時代性

東方学報 京都六一冊 三月

中国革命四十周年に思う 思想 七七七号 三月

福永光司著「莊子 内篇」より 悠 六卷三号 三月

黎澍先生を悼む 近きに在りて 一五号 五月

数奇なる中国の女神 朝日新聞夕刊 七月二〇日

キーワードで見る中国・社会科学院 読完新聞夕刊 八月二三日

序文(宋教仁著・松本英紀訳注「宋教仁の日記」)

同朋舎 一二月

・藤井讓治

●敦賀関係新聞目録(共編)

敦賀市 二月

●福井県史 資料編五卷(共編)

日本近世社会における武家の官位

「国家―理念と制度」

●播磨国佐用郡平福田住家文書目録(共編)

●京都町触集成 別巻二(共編)

●敦賀市史料目録(共編)

●安定期社会における人生の諸相―老人と子供―(共編)

京都ゼミナルハウス 一〇月

●敦賀の歴史(共編)

Bureaucracy and army in Tokugawa Japan

Senri Ethnological Studies 25 一二月

・藤田隆則

「ノリ」の過程

音声による言葉の断片化

音楽」7

書評・山下晋司著「儀礼の政治学」

・前川和也

シュメール・ウル第三王朝の属州ギルス経営 中村賢二郎編

「国家―理念と制度」

座談会・農耕文化を見直す

シュメール粘土板記録における土器と陶工 大津忠彦編「古代

中近東の土器―変遷とその背景」

中近東文化センター 一〇月

The agricultural texts of Ur III Lagash of the British

Museum (VI), *Acta Sumerologica* 11, 1989.

Rations, wages and economic trends in the Ur III period,

Ablorientische Forschungen 16, 1989.

・三浦秀一

「思辨録輯要」における内聖外王の学 岩見宏・谷口規矩雄編

「明末清初期の研究」 京都大学人文科学研究所 三月

・麥谷邦夫

道と氣と神——道教教理における意義をめぐって——

人文学報 65号 三月

道教遺跡参訪記

ODMCNV にこころ 東方宗教 七三号 五月

京都大学大型計算機センター広報 二二巻四号 八月

礼制に見える老人と子供 「安定期社会における人生の諸相」

京都ゼミナールハウス 一〇月

・森時彦

中国近代における機械製綿糸の普及過程

東方学報 京都六一冊 三月

・村田裕子

一満州文人の軌跡—穆儒丐と「盛京時報」文芸欄

東方学報 京都六一冊 三月

・山下正男

義務論理学史素描

宗教論序説—宗教的文章の本性について—

人文学報 64号 三月
人文学報 65号 三月

宗教の約束するもの—宗教空間でのベクトル計算—

人文学報 65号 三月

・山田慶兒

◎中国古代科学史論(編著)

古代人は自己—宇宙をどう讀んだか—「式盤」の解説(週刊朝

日百科・日本の歴史別冊10・史実と架空の世界)

朝日新聞社 一一月

・山室信一

書評・アラン・ブルーム著「アメリカン・マインドの終焉」

中央公論 三月

最後の「満州国」ブームを読む

中央公論 六月

民族および国家間認識の引照枠組としての社会・歴史理論

・山本有造

高増傑報告へのコメント 「世界の中の日本 I」(国際シン

ポジウム 第一集) 国際日本文化研究センター 二月

◎開港と維新 「日本経済史」3 (梅村又次と共編)

岩波書店 三月

概説 一八六〇—一八五年(梅村又次と共筆)

岩波書店 三月

明治維新期の財政と通貨

植民地経営 中村隆英・尾高煌之助編「二重構造」

「日本経済史」6 岩波書店 八月

八十翁貝原益軒の生活と意見—「篤信一世用財記」を中心に—

横山俊夫・藤井讓治編「安定期社会における人生の諸相」老

人と子供」

京都ゼミナールハウス 一〇月

・横山俊夫

マナー左右するマナー

京都新聞 一月一日

想いつくまに

京都大学国際交流会館ニュース16号 一月

2000年前の活性化案

産業活性化ニュース 財・関西産業活性化センター 二月

国際交流施設に関する基本構想策定調査業務Ⅱ 報告書(討論

参加)

横浜市長務局国際室 三月

ソフトで拓く新世紀―京都活性化への提言(佐和隆光氏らと共

同執筆・京都新聞社宛提出)

三月二七日

書評・加藤淳平著「日本の文化交流」文化会議二三八号 四月

京都活性化への提言―京都21会議(共同執筆)

京都新聞 四月二日

ホッコリデーのすすめ

京都新聞 四月二九日

京都大学人文科学研究所蔵

日本関係欧文図書総覧―一九五〇

年以前刊行分―

書誌索引展望13巻2号 五月

安定期社会の老人と子供

毎日新聞 九月一三日

りんくうタウンにおけるカルチャー・コア実現化方策―研究調

査報告書(討論参加)

千里文化財団 七月三一日

文明について―手垢しらべ―都市の美―本音のところ―余り六

／よほどのこと―文明の基本―家政学復興―クマの国―区切

り幻想―国際問題(「視点」連載)

毎日新聞 一〇月三日―十二月二六日

Some notes on the history of Japanese traditional household

encyclopedias, Japan Forum (Oxford University Press,

vol. 1, no. 2)

一〇月

●安定期社会における人生の諸相―老人と子供―(藤井讓治氏と共編著)

京都府文化フォーラム―第三回(企画・討論主宰・編集)

京都府文化芸術室 一一月

一筆啓上

会誌37 財・竹中育英会 一二月

C D I 株仲間からの京都への提言(内七点)

シー・ディー・アイ 一二月

・吉川 忠夫

今年私はこれをやりたい

中外日報 一月一日

道安教団在襄陽 谷川道雄編「日中国際共同研究・地域社会在

六朝政治文化上所起的作用」

三月

嶺南の欧陽氏 谷川道雄編「中国辺境社会の歴史的研究」三月

裴松之のこと(三)「世界古典文学全集・三国志Ⅲ」月報

曝書「中国文学歳時記」秋(下)

筑摩書房 四月

仏教にいれあげた天子―梁の武帝の仏国土―

朝日百科・世界

の歴史22

朝日新聞社 四月

書評・小倉芳彦訳「春秋左氏伝(上・中・下)」

サンケイ新聞 七月二二日

書評・三浦国雄「中国人のトポス」 思想 七八二号 八月

姚興の「通三世論」 「大乘仏典―中国・日本篇Ⅰ―」大智度

論」 月報 中央公論社 八月

●劉裕―江南の英雄宋の武帝―（中公文庫）中央公論社 一二月
「中外日報」社説 二七回 一月～二月

感銘を受けた本

・鈴木啓司

ダニエル・キース「アルジャーノンに花束を」（早川書房）

・光永雅明

Peter N. Dale, *The Myth of Japanese Uniqueness*,

(Croom Helm, 1986).

Andrew Gamble, *The Free Economy and the Strong State*

(Macmillan, 1988).

キース・トマス著、山内昶監訳「人間と自然界」（法政大学出

版局、一九八九）



人

文

第三六号

一九九〇年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中村印刷株式会社

非売品